

Syoziro Asahina at Taiping shan, Formosa) as its innate disposition. Sato who disproves the Scholanderian system, assumed the apothecia of the specimen in question to be gyrodisc instead of agglomerate leiodisc and named it *Umbilicaria Mayebarae* Sato.

前項に記したように *Umbilicaria pustulata* が日本にあるか無しかで騒がれて居た時前原勘次郎君が台湾阿里山で立派な有子器の標本を採集して送つてきの調査もそこそこに *Umbilicaria pustulata* の有子器品として植研にも図入りで発表したが戦後佐藤正己君が昭和23年に若干の不明標本と一所に此の前原標本を北米のイワタケ属専門家 Llano 氏に送つた所同氏は之を *Lasallia pennsylvanica* と鑑定して返してきた。当時筆者は此鑑定に不満を感じて居たが近頃になって朝比奈正二郎が1936年に台湾大平山で採集した標本を操広げた処上記前原標本と全く同一のものが数箇あつたので更によく観察した処, *pennsylvanica* は岩石生であるのに前原標本は木材生であり Llano は之を special case として看過して居るが、太平山の標本は全く木材着生でこれが此地衣の本性であり、又アセトン抽出物が K+ 染紅色を呈し *pennsylvanica* ではアセトン抽出物が K- と云ふ動かす可らざる差違を捕へたので Llano の鑑定は誤りであると見てよい。又この地衣の命名については、佐藤正己君は Scholander-Llano 式の分類に賛成しない関係上からとこの前原標本の子器を Gyrodisc と見て旧来の命名法を採用し *Umbilicaria Mayebarae* [Sato] として発表したがこの子器は Leiodisc の集合によるものと見ることも出来、又葉体表面が泡起して居る性質を考慮に入れると Scholander 式では *Lasallia* になる。

□田川基二: 原色日本羊齒植物図鑑 保育社 270 ページ (1959年10月) 1,500 円

シダの図鑑は何がいいでしょう、と聞かれて、そうですネ今までに出たシダ専門の図鑑はどれも手にはいりにくいものばかりになりましたが、そのうち田川先生のすばらしい図鑑ができますヨ、と答えて数年、図版ができ上ったのを見せてもらってから1年以上、念には念を入れてやっと完成した、まさに待望の書というべきものである。北は北海道から南は屋久島や種子島まで、今の日本の全地域に自生するシダ植物（トクサ類やヒカゲノカズラ類を含んで）400余種が収められ、72枚の原色図版に数種類ずつ載っている。この図に非常に苦心と時日、労力がはらわれたようで、特殊技術によって実物の写真から数枚ずつの原色の原版を作り、シダの細かい裂片がずれないように重ねて印刷されてあるのはまことにみごとである。そのためどの種類も一見してその特長がわかり、実物そっくりで標本のできたてを見る感じである。説明も要領よく、親切な検索表や註があつてわかりやすい。正確精密でごまかしのない点はさすが田川博士の著だと感心させられる。巻末に日本羊齒植物総目録 90 ページがついている。これは専門家でないとちょっと使いこなせない高級なもので、田川氏の永年の研究の結果の意見の要約ともいいうべき、かおり高い業績である。専門家から初心者までシダをやる人は必ず座右に置くべき良書である。(伊藤 洋)